

乳児期早期の基本的情動の発達と活動水準および 母親の情動表現性の影響

斐 美 沙¹⁾
岩 元 澄 子²⁾

要 約

本研究では、乳児期早期における基本的情動「喜び」「怒り」「恐れ」の発達について検討することを目的とし、各情動の発達と、それに対する乳児の活動水準および母親の情動表現性の影響について検証した。対象は、3～7カ月の乳児の母親30名であった。方法として、3カ月時および7カ月時に、乳児行動調査票 (Infant Behavior Questionnaire) と親の情動表現スタイル尺度 (Self-Expressiveness in the Family Questionnaire) を実施した。各情動について、3カ月時と7カ月時でt検定を行った。その結果、いずれの情動も発達していることが示された。また、7カ月時の各情動を目的変数、3カ月時の各情動を統制変数、各時点の乳児の活動水準および母親の情動表現性を説明変数として、ステップワイズ法による重回帰分析を行った。その結果、「喜び」の発達には7カ月時の活動水準および活動水準の変化量が正の影響、母親の否定的情動表現性が負の影響を及ぼし、「怒り」の発達には、母親の否定的情動表現性が正の影響を及ぼし、「恐れ」の発達には、活動水準の変化量が正の影響を及ぼすことが示された。本研究の結果から、「喜び」の表出が少ない乳児や、突出して「怒り」の表出が多い乳児への、母親からの早期の介入の可能性が示唆された。

キーワード：乳児期早期、情動発達、活動水準、母親の情動表現性

問題と目的

情動は、記憶や思考あるいは意志決定等の認知的側面と比較して、発達早期からその機能のある程度備えているとされている。LeDoux (1996) によると、情動は、個体発生的に極めて早期の段階から、原初的な意味での刺激評価に基づいて発動し、その影響下や制約下において発達が進行する。

機能主義的情動観に依拠する Sroufe (1995) や Campos (2004) は、情動は乳児期にはそれほど明確に分化しておらず、成熟や社会化の要因によって次第に分化してくると述べている。分化した情動とは、事象の新規性に対する原初的評価のような興奮や緊張状態

(前駆情動) とは異なり、事象の内容や意味の評価によって生じる反応のことである。Campos によると、生後1年くらいまでの間に、分化した情動としての「喜び」「驚き」「怒り」「恐れ」等の基本的な情動が現れ、それらの情動から分岐する形で、「共感」「羨望」「罪悪感」等の様々な情動へと発展していく。つまり、乳児期の基本的な情動の発達は、その後の、より高次の情動の発達のための重要な基盤にもなると考えられる。

乳児の基本的な情動の発現時期について、Sroufe (1995) は、2カ月頃に外界への関心による「快」、7カ月頃に「怒り」、12カ月頃に「恐れ」が発現するとしている。また、Lewis (2000) は、生後3カ月頃になると「快」から分岐する形で「喜び」が発現し、同じ頃に「悲

1) 久留米大学大学院心理学研究科

2) 久留米大学文学部心理学科

しみ」や「嫌悪」、4～6ヵ月頃には「怒り」、それより少し遅れて「恐れ」が発現することを報告している。日本においては、生後1年間の乳児の「怒り」について、1事例を縦断的に観察した研究（坂上、2010）や、6ヵ月以降の乳児の「喜び」「怒り」「恐れ」の発達を調査した研究（星、2004）などはあるが、乳児期早期からの基本的情動についての実証的研究はされていない。

乳児期には、情動の他に、運動能力もダイナミックに発達する。Campos & Anderson (2000) は、はいはい未開始の乳児とはいはい開始後の乳児の情動を比較し、はいはい開始後の乳児の方が、怒りの表出やその強度が増し、警戒心が強かったことから、はいはいの経験が乳児の情動の質を変容させる可能性があることを指摘している。乳児期にはその他にも様々な運動能力が発達することを踏まえれば、乳児自身の運動能力の発達に伴う活動水準は、乳児の情動の発達に影響を及ぼすと考えられる。

また、Lewis (2000) は、乳児期に発達する基本的な情動「喜び」は、3ヵ月を過ぎた頃から、人の顔等の親近性の高い事象や対象を認めて現われ、「悲しみ」は、母親との相互作用の中断といった社会的刺激に随伴して現れると述べている。このことから、情動の発達には、乳児自身の要因の他に、他者からの働きかけの影響も想定される。Davies & Cummings (1994) は、乳幼児の情動は他者の情動の影響を受けて発達するとして、乳幼児に直接向けられた情動でなくても、乳児が、例えば親同士等、第三者間で葛藤や怒り等が表出されている環境にいることでも、情動の発達に影響を受けると述べている。乳児期の情動の発達と養育者の情動の表出に関する研究として、Halberstadt (1995) は、家族の中で表出される情動表現性、すなわち情動に関係した言語的、非言語的な表現の持続的なパターンまたはスタイルを測定する尺度である Self-Expressiveness in the Family Questionnaire (SEFQ) を開発している。この尺度を用いて、Eisenberg (2001) は、母親の情動表現性が幼児の感情表出に及ぼす影響について検討し、親の情動表現性と幼児の自己コントロールに関連があることを明らかにしている。また、田中 (2009) は、幼児の情動表出について、親の否定的情動表現性が幼児の否定的情動の生じやすさに影響を与えることを報告している。このように、子どもの情動の発達には親の情動表現性が影響していることが明らかとなっているが、いずれも幼児期以上の子どもを対象としたもので、乳児の情動の発達への影響につ

いては調べられていない。

以上のことから、本研究では、乳児期早期の基本的な情動の発達と、それに対する乳児の活動水準と母親の情動表現性の影響について検討する。

方 法

1. 対象

2011年4月～11月に熊本県内のX病院での3ヵ月健診を受けて、医師によって健診において問題がなく調査を実施できると判断された母子のうち、研究について文書と口頭で説明し同意の得られた母親30名を対象とした。年齢は、20代が10名、30代が20名で、就労者10名、非就労者20名であった。乳児は、男児が13名、女児が17名で、第一子14名、第二子13名、第三子3名であった。

2. 手続き

3ヵ月健診日に、質問紙を2部配布し、1部は当日に、もう1部は7ヵ月健診時に院内に設置された回収箱にて回収した。質問紙は無記名で、あらかじめランダムに打った通し番号によって1回目と2回目の質問紙の照合を行った。なお、本研究は久留米大学倫理委員会による承認を得て行われた。

3. 質問紙構成

乳児の情動に関して

Rothbart (1986) によって作成された乳児行動調査票 (Infant Behavior Questionnaire) の日本語版 (中川、1998: 以下IBQと略す) の、「微笑と笑い」「制限を与えられた場合の負の情動」「突発的或いは新規刺激に対する負の情動や接近潜時」の3因子を使用した。質問項目は全51項目で、過去1週間以内について、それぞれに「全くなかった(1)」「たまにしかなかった(2)」「ない時の方が多かった(3)」「ある時とない時と半々(4)」「ある時の方が多かった(5)」「ほとんどたいていあった(6)」「いつでもあった(7)」の7件法で回答する。なお、「制限を与えられた場合の負の情動」と「突発的或いは新規刺激に対する負の情動や接近潜時」の2因子について、本研究では星 (2004) に従い、それぞれ「怒り」「恐れ」と記述する。また、「微笑と笑い」について、星は「快」と記述しているが、乳児の「快」は3ヵ月頃に「喜び」へと分岐する (Lewis, 2000) ことを踏まえて、本研究では「喜び」と記述する。

乳児の活動水準に関して

IBQの、「活動水準」の因子を使用した。質問項目は14項目で、回答方法は乳児の情動に関する尺度と同様の7件法である。

母親の情動表現性に関して

Halberstadt (1995) によって作成された親の情動表現スタイル尺度 (Self-Expressiveness in the Family Questionnaire) の日本語版 (田中, 2009: 以下 SEFQ と略す) を使用した。SEFQ は、「肯定的情動表現性」と「否定的情動表現性」の2因子から成る。質問項目は全35項目で、多くの人々が遭遇すると考えられる情動的な場面で、特定の情動を普段どのくらい家族に表すかについての頻度を、「全くない(1)」「ほとんどない(2)」「どちらかといえばない(3)」「どちらでもない(4)」「どちらかといえばある(5)」「よくある(6)」「いつもある(7)」の7件法で回答する。なお、「肯定的情動表現性」は他者に対して共感的で、嫌悪感や不快感を与えにくく、人間関係を円滑にするような情動表現性であり、「否定的情動表現性」は自己中心的に他者に不快感を与えやすい情動表現性である。

結 果

1. 各情動の発達の変化

「喜び」「怒り」「恐れ」の発達の変化を調べるために、3ヵ月と7ヵ月の情動得点の t 検定を行った。その結果 (表1)、「喜び」「怒り」「恐れ」のいずれの情動においても、3ヵ月と7ヵ月で有意差がみられた。

2. 活動水準の発達の変化

活動水準の発達の変化を調べるために、3ヵ月と7ヵ月の活動水準得点の t 検定を行った。その結果 (表2)、3ヵ月と7ヵ月で有意差がみられた。

3. 母親の情動表現性の時間的変化

母親の情動表現性の時間的変化を調べるために、3ヵ月と7ヵ月の情動表現性の各下位尺度得点の t 検定を行った。その結果 (表3)、肯定的情動表現性、否定的情動表現性のいずれにおいても、有意差がみられなかった。

このことから、この間、母親の情動表現性の時間的変化はみられず、母親の情動表現性は比較的安定した特徴であると考え、2時点の各下位尺度得点の平均点をもって母親の情動表現性得点とした。

4. 各情動の発達への活動水準および母親の情動表現性の影響

「喜び」「怒り」「恐れ」の各情動の発達への活動水準および母親の肯定的情動表現性・否定的情動表現性の影響を調べるために、7ヵ月の各情動を目的変数、3ヵ月の各情動を統制変数、活動水準および母親の各情動表現性を説明変数としたステップワイズ法による重回帰分析を行った。その結果を表4、表5に示す。いずれの情動においても、3ヵ月の活動水準に有意な影響はみられなかった。また、「喜び」の発達には、7ヵ月の活動水準に有意な正の影響、母親の否定的情動表現性に有意な負の影響がみられた。「怒り」の発達には、母親の否定的情動表現性に有意な正の影響がみられた。

次に、各情動の発達への活動水準の変化量の影響を調べるために、7ヵ月の各情動を目的変数、3ヵ月の各情動を統制変数、7ヵ月の活動水準と母親の各情動表現性を説明変数としたステップワイズ法による重回帰

表1 各情動の3ヵ月と7ヵ月の平均得点と t 検定結果

	3ヵ月	7ヵ月	t 値
喜び	3.7(1.11)	4.6(0.87)	5.13***
怒り	3.3(0.62)	3.9(0.57)	4.40***
恐れ	2.7(0.80)	3.3(0.96)	2.76***

() は SD *** $p < .001$

表2 活動水準の3ヵ月と7ヵ月の平均得点と t 検定の結果

	3ヵ月	7ヵ月	t 値
	3.2(0.81)	4.5(0.45)	9.34***

() は SD *** $p < .001$

表3 母親の情動表現性の3ヵ月と7ヵ月の平均得点とt検定の結果

	3ヵ月	7ヵ月	t 値
肯定的情動表現性	5.5(0.72)	5.5(0.75)	0.42
否定的情動表現性	3.8(0.64)	3.9(0.60)	0.32

()はSD

表4 3ヵ月の活動水準と母親の情動表現性の乳児の情動発達への影響

説明変数 \ 目的変数	喜び	怒り	恐れ
	3ヵ月時の活動水準	-	-
肯定的情動表現性	-	-	-
否定的情動表現性	-.38*	.35*	-
R ² 値	.40	.26	.03
F 値	8.17*	4.81*	1.61

*p < .05

表5 7ヵ月の活動水準と母親の情動表現性の乳児の情動発達への影響

説明変数 \ 目的変数	喜び	怒り	恐れ
	7ヵ月時の活動水準	.37*	.23
肯定的情動表現性	.18	-	-
否定的情動表現性	-.36*	.39*	-
R ² 値	.56	.32	.09
F 値	7.92*	3.82*	2.43

*p < .05

表6 活動水準の変化量と母親の情動表現性の乳児の情動発達への影響

説明変数 \ 目的変数	喜び	怒り	恐れ
	活動水準の変化量	.25*	.31
肯定的情動表現性	-	-	-
否定的情動表現性	-.37*	.41*	-
調整済み R ² 値	.57	.35	.22
F 値	7.30*	4.28*	3.25

*p < .05

分析を行った。その結果を表6に示す。「喜び」の発達には、活動水準の変化量と、母親の否定的情動表現性に有意な負の影響、「怒り」の発達には、母親の否定的情動表現性に有意な正の影響、「恐れ」の発達には、活動水準の変化量に有意な正の影響がみられた。

考 察

1. 乳児期早期の基本的情動の発達について

「喜び」「怒り」「恐れ」のいずれの情動得点も、3ヵ月より7ヵ月の方が有意に高かった。これらのことか

ら、「喜び」「怒り」「恐れ」のいずれの乳幼児期早期の基本的な情動もこの間に発達していることが明らかとなった。

2. 各情動の発達の要因について

(1) 「喜び」の発達

「喜び」の発達には7ヵ月の活動水準および活動水準の変化量が有意な正の影響を及ぼしていた。乳児は、3ヵ月を過ぎた頃から、気に入らないことに対してそっくり返るなどの反応をみせたり、ものを取ったり投げたりするなどの運動ができるようになる(加藤, 2005)。また, Lewis (2000) は, 乳児の3ヵ月頃の「喜び」は, 不快刺激の解消に伴って現れるようになると述べている。IBQの項目にあるような「手足をバタバタ動かす」や「もがいたり, そっくり返る」などの動きは, 周囲の養育者による「不快」の解消も促すものと考えられる。よって, 7ヵ月頃に活動水準が高いことや, 活動水準が高まったことが, 結果として不快刺激を解消させ, 「快」および「喜び」の発達に正の影響を与えたと考えられる。

また, 乳児の「喜び」の発達には, 母親の否定的情動表現性が有意な負の影響を及ぼしていた。興津(2003)は, 幼児の情動表出が肯定的であるか否定的であるかは, 母親の情動の肯定的な表出ではなく否定的な表出によって決まることを指摘しているが, 本研究

の結果はそれを支持するものである。乳児期早期の7ヵ月という段階からすでに、「喜び」の発達に母親の否定的情動表現性が影響を与えていることが明らかとなった。

(2) 「怒り」の発達

「怒り」の発達には、各時点での活動水準や活動水準の高まりは有意な影響を及ぼしていなかった。先述したCampos (2000)の研究によれば、乳児の情動表出の変化には、「はいはい」の開始とともに活発になる乳児の探索行動が養育者から制限されるようになったことが関与することが示唆されている。「怒り」が、このように制限された時に生起する情動であるとするれば、7ヵ月程度の乳児の活動は、制限されるような活動水準に達してはおらず、「怒り」と活動水準との関連がみられなかったものと考えられる。

また、乳児の「怒り」の発達には、母親の否定的情動表現性が有意な正の影響を及ぼしていた。田中(2009)は幼児期の子どもを対象として、親の否定的情動表現性の生じやすさと子どもの否定的情動の生じやすさとの関連を明らかにしているが、この結果から、さらに年齢の低い乳児期早期から、養育者の否定的情動の生じやすさと乳児の否定的情動との関連があることが明らかとなった。

(3) 「恐れ」の発達

「恐れ」の発達については、乳児の活動水準の高まりが正の影響を与えていることが明らかとなった。Campos (2000)は、はいはい未開始の乳児より、はいはい開始後の乳児の方が警戒心が強いことを明らかにしているが、活動水準は、移動したりするなどの粗大運動活動についての項目であり、新たな運動能力の獲得や活動水準の高まりに伴って活動範囲を広げ、転倒や怪我の経験が増えたことで「恐れ」が発達したものと考えられる。

今後の課題

本研究では、母親の否定的情動表現性が、乳児の「喜び」「怒り」の発達に影響を及ぼしていることが明らかとなった。このことは、「喜び」の表出が少ない乳児や、突出して「怒り」の表出が多い乳児への母親からの早期介入の可能性を示唆するものであると考えられる。しかし、なぜ母親の情動表現性のうち否定的情動表現性のみが影響を与えたのかについては明らかでなく、今後さらに詳細に検討していく必要があるだろう。また、母親の情動表現性以外の要因として、母親以外の家族の情動表現性や、乳児が日常どのような環境にい

るか等も踏まえて、検討する必要もあると考えられる。

謝 辞

本論文の執筆にあたり、研究の場を与えてくださったX病院の先生方と、調査にご協力くださいましたお子様とご家族の皆様方に心よりお礼申し上げます。

引用文献

- Campos, J., & Anderson, D. I. (2000). Travel broadens the mind. *Infancy*, 1, 149-219.
- Campos, J. J., Frankel, C., & Camras, L. (2004). On the nature of emotion regulation. *Child Development*, 75, 377-394.
- Cummings, E. M., & Davies, P. T. (1994). Maternal depression and child development. *Journal of child Psychology and Psychiatry*, 35, 73-112.
- Davies, P. T., & Cummings, E. M. (1994). Marital conflict and child adjustment: An emotional security hypothesis. *Psychology Bulletin*, 116, 387-411.
- Eisenberg, N. (2001). Mother's emotional Expressivity and Children's Behavior Problem and Social Competence: Mediation Through Children's Regulation.
- 遠藤利彦 (2005). 感情 岩波書店.
- Halberstadt, A. G. (1995). Self-Expressiveness Within the family Context: Psychometric Support for a New Measure. *Psychological Assessment*, 7(1), 93-103.
- 星信子 (2004). 乳児期の情動制御の発達に関する基礎的研究: 家庭における子どもの観察と質問紙評定による母親変数の縦断的検討, 北海道浅井学園大学短期大学部研究要 42, 203-214.
- 加藤忠明 (2005). 新版 図説小児保健 第2版.
- LeDoux, J. (1996). *The emotional brain: The mysterious underpinnings of emotional life*. New York: Simon & Schuster.
- Lewis, M. (2000). The Emergence of Human Emotion. In M. Lewis & J.M Haviland-Jones (Eds.). *Handbook of and emotions*. Second edition. New York: The Guilford Press., 265-280.
- 中川敦子 (2009). 乳児の行動のチェックリスト (IBQ-R) 短縮版の作成, 人間文化研究 12, 15-25.
- 興津真理子 (2003). 母親の感情表出性と子どもの感情表出との関連~子どもの表出に影響を及ぼすのは、母親のネガティブな表出性といえるのか~, 日本パーソナリティ心理学会 12, 9-24.
- Rothbart, M. K. (1981). Measurement of temperament

in infancy, *Child Development*, 52, 569-578.
坂上裕子 (2010). 乳児期におけるフラストレーション／怒りの発達過程の検討—一児の縦断的自然観察から—, *青山学院大学教育人間科学部紀要*, 1, 219-241.
Sroufe, L. Alan (1995). *Emotional development: The*

organization of emotional life in the early years, Cambridge University Press.
田中あかり (2009). 母親の情動表現スタイルが幼児の気質に及ぼす影響, *発達心理学研究*, 20 (4), 362-372.

Influence of infant's activity level and mother's expressivity on basic emotional development in early infancy

MISA BAE (*Graduate School of Psychology, Kurume University*)

SUMIKO IWAMOTO (*Department of Psychology, Kurume University*)

Abstract

The purpose of this study is to examine basic emotional development in early infancy.

Regarding the basic emotions such as "pleasure", "anger" and "fear", we looked into influence of the infants' activity level and their mothers' expressivity.

The subjects were 30 mothers of infants. They answered the Infant Behavior Questionnaire and the Self-Expressiveness in the Family Questionnaire at two time points: when the infant was three months old and seven months old.

The results of the t-test about each emotion, showed every emotion was developed. The results of stepwise regression analysis (objective variable: each emotion at 7 months of age, control variable: each emotion at 3 months of age, explanatory variable: activity level, mother's expressivity) showed that (a) pleasure: the infants' activity level at 7 months of age has had influence of positive and mothers' negative expressivity has had influence of negative, (b) anger: mothers' negative expressivity has had influence of positive, (c) fear: the rise infants' activity level has had influence of positive. Therefore, it was showed that mothers' negative expressivity affects development of "pleasure" and "anger", infants' activity level affects development of "fear".

Key words: early infancy, emotional development, activity level, mother's expressivity